

一九六四年度運営方針

運営委員長 高 田 俊 士

新しい運営委員会が発足して以来既に二ヶ月を経過した、桜花爛漫の候、黄金の週、新緑の候と経て、今や暦の上では梅雨の季を迎えんとしている。才一回の歴史研究会に於て今年度の具体的な活動方針を採択し、その基本的綱領に沿つて活動は一応適なく促進せられてゐる。しかしながら決して満足すべき活動状況にあるとは断言出来ない。何故か。それは活動に参加する者に対し、何等閑手せざる者も歴史研究会会員の大多数を占めてゐるからである。この問題点に関しては、昨年度總結にも否、十余年の歴史を誇る歴史研究会の毎年の運営總結にも繰り返し取上げられ、且つその解決が叫ばれてきたのである。にもかゝらず、その成果たるや微々たるもので、焼石に水の如きものであつた。こゝに於て既に採択され曲りなりにも軌道に乗つてゐる具体的な活動方針を繰り返すことをせず、何故曲りなりにしか軌道にのらないのか、つまり、前述の如き問題点に存する本質、とりもなおさず歴史研究会のよりよき発展への問題矣の究明と解決策を論じて行かんとするものである。換言すれば旧々の具体的な活動を通してその底に流れてゐる巨大な汚物を探索排除し清流を流さんと試みるものである。もつともこれ

から述べる一試案つまり今年度の運営方針が絶体的真理であるとは思われないが、しかし現在の時矣に於ては最も望まれるべき方針であろうとは思ふ。あくまでも歴史研究会のよりよき発展を念じつゝ、早速述べて行こう。

先ず才一に歴史研究会の二重構造、即ち歴史学研究の団体であると同時に自治会の下部組織たる歴史クラスであるという性格を考察しなければならぬ。かゝる二重構造は昭和三十二年度以来歴史研究会を性格つけてきたものである。

そしてこゝにこそ活動の氾濫が余儀なくされる最大の因が存するのである。研究活動とクラス活動との混同は遂には個人に於ても又団体に於ても、その活動が支離滅裂化してしまうものである。それは、毎年新入生諸君が最初は積極的に活動に参加されるのに、時が立つにつれその新鮮なる意慾も流るゝ活動の場から足が遠のいて行かれることを見れば明うかである。二重構造は、研究活動の拡大に伴はう経費の問題を解決する方策として打ち出された。自治会費のクラス割当て額に加えクラス内サークルとしての自治会助成金をも獲得することによつてそれを解決した。

それ故にこそ、自治会の受請に基づく各種の討論が積極的に展開されなければならないことは、言うまでもない。

学生自身の問題、学生と取巻く環境の問題、或は社会問題を自治会の下部組織として討論するに於て何等異論はない。しかし年々歴史学研究という学生の本分たる学問の探究に比し余りにも、現実の社会問題の追求が強調されすぎているのではないか。歴史研究会がクラス内サークルとして発足したもう一つの

理由に研究活動の旺盛化に伴う人員確保にもその迫りがあったようである。若干の人員確保には効果があつたかも知れないが、この事の故に歴史は専攻したが、歴史学研究に対する深い関心の断ち切り難い未練はあつても他の生活活動の価値には、替えられぬとして研究に参与出来ぬ人々を多く産み出したとも言える。歴史研究会が一部活動家の活動の場としてしか現在存在していない問題の本質は、ここに一点が明らかになされた。

即ち前述の如く現実の社会問題の追求重視傾向について行くことの出来ぬ人々と研究活動に身を打ち込むことの出来ない人々とが必然的に存在することである。かゝる会員の会からの逃避的傾向に対し、それを防衛する手段として過去に於て運営委員会の指導性の強化が何度となく試みられてきた。月報発刊などは、その努力の結果によつて誕生したものである。昭和三十一年度に於て実施された委任状の発行も又その一例である。これらの努力も一時的に効果を發揮しはしたが、問題点の根本的解決には至らなかつた。従つて問題点の本質は運営委員会の指導性以前に立ち帰らなければ把握しえないのである。問題の本質は、各会員の態度にあるのである。

前述に於て会からの逃避的傾向性をもつ会員が必然的に存在すると明らかにしたが、この必然性自体が会員自身の会に対する態度、姿勢の欠陥から生じるものである。態度の欠陥とは何か。苟も三重大学文学部に於て歴史を専攻した学生が、歴史学研究、歴史教育の考察、学生としての現実の社会問題の追求といったものを志を同じうする歴史研究会（クラス）に於て共に秘めて行くことが、学生生活に於て最も優先されるべきもの

だという態度、姿勢の欠如を指すのではなからうかと思われる。全会員がかかる態度、姿勢を取り、且つ運営委員会の指導性の強化がなされた時、歴史研究会は飛躍的發展を遂げるのではないかと考えられる。

こゝに於て今年度の運営方針として、全会員の会員としての義務と責任を自覚し果そうという態度を取つて行こうとする雰囲気を取り起こすこととスローガンとして掲げ、その達成に一步でも近づきうるよう努めて行こうではないか、具体的にどう行うとするというのではなく、お互にお互の心と心との融れ合いによつて最初は意識的に自己の義務と責任を自覚して行き、後には無意識のうちに自覚されるように努力して行こうではないか。その時に、はじめて問題点は解決されるのである。

次に才ニ点として組織の複雑性に伴う運営の繁雑化にどのように対処して行かなければならないかを考えてみよう。

才一 奥で述べた二重構造、更には原始古代史部会、近世史部会、西洋史部会という三部会制、十三・十四・十五・十六期という期別結合の四つの同期会、加うるに、今この時点に於ては存在しないが、近日中に結成されるであろう。

社会科学各クラスが結合し、相互の角度から社会科学、社会教育を探究して行こうとする社会科連盟内での活動といつたように全く複雑多に渡る機構をどのように対処すれば破綻なく歴史研究会を発展の方向に持つて行けるのであらうか。現代文明のメカニズムによる人間精神の喪失が叫ばれている今日であるが、それと相共通したディレンマを歴史研究会の内にも見出されるようである。学究における内面を追求する研究発表会と外

面を討論するクラス討論会とを同日に引き続いて挙行するのは運営として、誤つていと各歴史教官方に指摘されたのであるが、その事は十分承知しているのである。

前述の如き複雑性から止むを得ず挙行しているのが現状である。才一兵で述べた問題もこの複雑性からくる勢力の分散を看過することが出来ない。何となればそれは歴史研究会の崩壊の才一歩だからである。それでは運営委員会の巧みな手廻さばきによつて解決されるのであろうか。それは決して根本的な解決にはならないであらう。では如何にすべきか。運営の合理化が唯一の解決策であらうと思われる。運営委員会の構成メンバーとして、役員、各種委員会代表、各期運営委員、各史部会長と存するのであるが、この私務を依頼された者が、その義務と責任を果す努力を惜しんでならないのは勿論のこと、一方依頼した側の全会員も当然にそれを盛りたて、行くべき義務と責任の存するのは言うまでもないことである。しかしながら現状に於ては、その手が満足になれていないのである。歴史研究会のよりよき発展のためには、従前通りの現状であるから、何も手を荒立てなくてもよいではないかと放言する輩の如き消極的態度はいけぬ。前よりもよりよくしてゆこうという前向きな態度を取らなければいけない。発展は限りなき前進を続ける努力の結果によつてしかもたらされない。

こゝに於て今一つの運営方針として、運営の合理化、つまり、私務を依頼した者、された者お互が自己を高める。ひいては歴史研究会の発展に寄与するという前向きの姿勢の相剋の促進を掲げる、これによつてこそ才一兵に挙げた組織の複雑性に対

処しうるであらう。

最後に、大学本部の旧津地方検察庁への移転に伴う歴史研究会の環境が変化せざるさえないのは必至であると思われるが、その変化を如何にしてより好ましき環境に高めて行くか、どう対処すべきかを論じてこの稿を閉じたい。

歴史研究会の事務室として使用している歴史資料室は、一室を地理教官室と併立によつて隔てられているのであるが、最近地理教官側から歴史教官側に歴史研究会側の騒音によつて研究が妨げられるという苦情が相当強硬に持ち込まれたようである

勿論堅意の非は、卒直に認めなければならぬ。しかしその事の解決策として両教官側の方で教官室の入替など色々考慮せられてゐるようであるが、学生側の意見をもその考慮の要因として十分反映されるよう注意して見守つて行かなければならぬ。更に古代史部会の多年の努力の結晶である、あの麗大な発掘遺物の処置が大学側から促されているのであるが、貴重な遺物史料は厳重に保存せられなければならない。昨今の藤田廃寺址問題とも相関連し、文化財保護のため、歴史研究会はその事の啓蒙の役割を担わなければならない。

以上、運営方針を述べてきたのであるが、これらの方針に沿つて歴史研究会の一層の発展の爲に、全会員がこぞつて寄与、関与せられんことを願つて止まない次第である。何はともあれ研究を通じて結ばれる心の絆こそ、最も好ましい、且つ尊い学生としての人間関係なのではないだろうか。一致団結して、限りなき前進を続けよう。

昭和39年5月31日 記